

## 2015年 第6回総会・学会大会の報告

2015年11月14日、明治大学駿河台校舎において日本ことわざ文化学会第6回総会・学会大会が開催された。概要は以下のとおりである。

### 【総会】

穴田義孝会長の開会挨拶の後、議長に藤井渉会員が選出された。2014年度の活動報告および決算報告、2015年度の活動計画および予算案が提出され、いずれも全会一致で承認された。

これに続き、穴田会長より新理事候補者（穴田義孝氏、石原仁誌氏、小貫和洋氏、釜崎太氏、小森英明氏、清水泰生氏、時田昌瑞氏、中尾暢見氏、西田知己氏、森洋子氏、山口政信氏、以上11名）の推薦があり、満場一致で承認された。

なお、午後の研究発表に先立ち、昼休みに開催された理事会において互選された時田会長から、副会長には山口氏、事務局長には小森氏が就任した旨の報告があった後、抱負が語られた。

### 【学会大会】

#### 1.【研究発表】(司会:小森英明)

##### ①ことわざ調査と世帯調査のコラボレーションが生み出すもの

—学際的な方法が拓く社会科学研究的な新たな可能性—

発表者：立柳 聡

山梨県北都留郡小菅村にて実施中のことわざ調査と、小菅村にある8地区のうちの1つである小永田地区において実施中の世帯調査についての詳細な報告がなされた。

世帯調査では明治大学政治経済学部で代々受け継がれてきた世帯調査票を用いて調査を実施していること、調査から社会構造を浮き彫りにする手法が紹介された。そして、山林と畑の所有有無、相続慣行、隣保組の視点から格差が照らし出されているという知見が示された。これにより、「米の飯の次は麦の飯」「あの家は両養子」といったことわざには、先の生活が映し出されていることが明らかになった。

立柳氏の発表は、世帯調査に加えて日常生活に息づく「ことば」としての「ことわざ」が、有効な分析指標になり得ること、学際的な社会科学的研究が、ことわざの新たな研究手法としての可能性を有していること、を明らかにした。

## ②ことわざの創作と笑いの関連について—ことば遊びの観点から—

発表者：矢島 伸男 ・ 野村 真之介

モクレンこと、プロのお笑い芸人として活躍している矢島伸男氏と野村真之介氏は「ことわざ」が、漫才を創作する題材として使うことが多い点を指摘した。その理由として題材の親しみやすさ、テンポの良さ、創作における自由度の高さを挙げ、もじりことわざ（意味の取り違いや誤用）、創作を織混ぜることによって、もともとのことわざに新しい命を吹き込む創作行為であることを指摘した。

これに続き、創作ことわざ漫才が披露され、笑いの渦の中でことわざの威力を実感した。

## 2. 【シンポジウム】（司会：山口政信） テーマ：「ことば遊び と ことわざ」 パネリスト

### ■山口政信：ことわざと絵で戯れる地口行灯

日本文芸の原点ともいえる地口（もじり、洒落に包括されることば遊び）と、戯れ絵で構成された地口行灯について、ことわざを元句にしたユーモアに満ちた作品が紹介された。

行灯に地口が書かれた地口行灯は、絵主従文の江戸中期に始まった。日本語は多様な同音異義語や類音異義語が存在することからズレを生じやすく、そこによく知られたことわざが活かされてきた。今でも地口や地口行灯づくりが人気を呼んでいるとのことであった。

### ■相羽秋夫：ことわざとしゃれことば

相羽秋夫氏は、お笑いが専門であり、しゃれことばの紹介とその仕組みを報告した。“二段オチ”をつける手法や、何かに譬えてオチをつける手法を具体的に解説しつつ、お笑いには「反まじめ」の意味合いも含まれると述べ、「反まじめなことわざ」の概念を提示した。また、笑いは健康によい作用を及ぼすことがわかりつつあるとも語った。

### ■馬場雄二：ことわざの視覚化

馬場雄二氏は、土曜のゴールデンタイムに放映している「世界一受けたい授業」で講師を担当。同番組は、3年間連続で子どもに見せたい授業になっている高視聴率番組です。その番組では、ことわざを視覚化する試みをしており、その効果・効用として①即断性に優れている、②低年齢でも理解できる、③国際性、④具体性などを挙げた。そして、ことわざを視覚化した「カルタ」へと応用を試みていることが報告された。

## ■時田昌瑞：遊樂のことわざ世界への誘い ―遊びことわざの展開へ―

時田昌瑞氏は、主要な新聞やメディアよりことわざを抽出して頻度をカウントした結果、内容よりも表現に種々の技巧を駆使した「娯楽」のことわざは、使用頻度が低い傾向にあることが判明したと述べた。とはいえ、このような遊びことわざこそが現代社会に求められており、その復活を期待したい、との問題提起がなされた。

### 【意見交換】

4人のパネリストによる個別報告があった後、漫才コンビの参加も得て、意見交換が始まった。その冒頭から、フロアから自作の地口が披露されるなど、盛り上がり予感が会場に漂った。

矢島氏は、お笑い芸には基本となる方程式があること、それを下地に試行錯誤している実情を語った。ことわざは多くの人に知られているので、笑いには格好のネタであると語り、漢字をスクラップ&ビルドする形式や、同音異義語を探す手法も紹介された。たとえば、「飛び込み自殺する人が靴を脱いで揃えるのはなぜか」。「はかない（履かない／儂い）命」。ボケとツッコミにも似たフロアとのキャッチボールは流石。

話は横に逸れ、ことばの乱れについての発言が相次いだ。これに対し時田氏は、ことばの乱れは、ことば遊びが盛んだ江戸時代にも見られたことから、目くじらを立てても流れには逆らえないのでは、と締めくくった。そしてさらに、ことわざを組み込んだ数え歌は見当たらない、文学の中に創作された句が新ことわざになる可能性はあるとも語った。

誇張と逆説を用いると笑いがとれるという相羽氏は、シャレことばとことわざには、〈反まじめ〉という意味において共通していると述べた。そして、要は何かに譬え、擬えることがオチにつながるとして、それが動物であればクリームもつかない、と笑わせた。

馬場氏は、漢字の書き取りがペナルティーに課せられたことから、漢字嫌いになったことが話された。しかし、その漢字を絵にすることがライフワークになるのだから不思議。視覚化した漢字を子どもがおもしろがるのが励みになってきた。ことわざはその格好の教材であることなどが披露された。

### 【懇親会】

飛び入りの余興が特徴の懇親会。今年も日本笑い学会にも所属する中村富美会員の作詞になる認知症予防歌、「ボケない小唄」が飛び込んだ。さらには、矢島氏と野村氏が、お題を受けての即興漫才や楽器演奏を披露。参加者からは3人に惜しみない拍手が送られた。

懇親会は、学会を支える会員の《知識＋技術＋思いやり＝笑顔》が重なるス

ページとして、その意義深さを感じた 2 時間であった。

—以上—